

観月堂

この比較的小さな木造の建物は、漢陽（現在の韓国ソウル）にあった李氏朝鮮の宮殿の一部であったと言われており、その建立は15世紀半ばにまでさかのぼると思われています。1924年、朝鮮が日本の支配下にあった際に、この建物は東京の裕福な実業家の邸宅内に移築されていましたが、それが高徳院に寄贈されました。現在、この建物の中には江戸時代後期の菩薩観音立像（サンスクリットで「アヴァローキテーシュヴァラ」、聖観音）が収められています。聖観音は阿弥陀如来の主要な脇侍の一人であり、大乘仏教においては広く信仰の対象となっています。

観月堂という名前は、文字どおり「月見をするお堂」という意味ですが、横幅が約7.45メートルあります。柱には朝鮮の伝統的な彩色の痕跡が残っていますが、その他の木造の部分には装飾的なモチーフの精緻な彫刻がほどこされています。